

# パスカルの《アポロジ》の プラン復元に関して (XI)

竹 下 春 日

前回は、(六) — 18° 《宗教の基礎と反論への回答》と 13° 《理性の服従と利用》について — における (ロ) まで論じたので、今回はこの続きを行う。

(ハ) — 以上の (イ), (ロ) によって、われわれは、13° が 18° と 19° 以降とに対して、緊密な関係を構成していることを理解しつつ、更めてここで《アポロジ》の各部分 (章群より成るまとまりのあるもの) のテーマを、概観することにし度い。なぜならこの事は、13° の位置決定に至大の役割を果すであろうからである。《アポロジ》の《第一部》は、人間の偉大さと悲慘の対立を中心とする人間存在の矛盾を基調としている (詳細は後日に譲る)。これに対し、《第二部》は大別して二つに分れる。前半 (12°・15°・15° bis・10°・16°・9°・17°) は至福論を叙述の主流としており、後半 (18° 以下) は《神の証明》を究極とする《宗教の証拠》を、論述の重点に置いている<sup>(12)</sup>。

かように全体を通覧するとき、13° 《理性の服従と利用》が、《超自然的なもの》(奇蹟, 預言等) と係わることを主旨とするかぎり、《第一部》に所属しえないことは明らかであり、《第二部》の前半に位置しえないことも、同様である (六のロ参照)。したがって 13° の占めるべき位置は、(a) 18° の直前か、(b) 18° と《宗教の証拠》(19°~26°) の間か、または (c) 《宗教の証拠》の後 (28° 《結論》の前) か、の三つの場合 (a・b・c) の何れかである。

まず最後の (c) ではありえない。なぜならパスカルは、シャロンの区分のような《われわれをうっとうしくさせ、退屈させる》叙述方法を否定し (La. 48—Br. 62), 《最もよく人の心に食い込む》s'insinue le mieux 書き振りを好んだからである (La. 927—Br. 18)。要するに彼は、《垢抜けした様子》le bon air (La. 48—Br. 62) を求め、《人の気に入る》agréeer (《説得術について》)<sup>(13)</sup>

ことを望んだのである。したがってパスカルは読者の反応を常に計算していたのであり、その関心を惹くことに努めたと言えよう。かようなパスカルの叙述態度を考慮したとき、われわれは彼が《アポロジ》の最も重要かつ興味ある《神の証明》を、著述の最後の部分（結論を除いて）に予定したことは、想像に難くない。何故ならかくすることによって、読者の関心を最後まで持続せしめることが、可能となるからである。それゆえ、27°《結論》の直前に来るものは、《宗教の証拠》としての《神の証明》であって、13°ではない。

次に (b) の場合も、ありえない。Non classé の La. 12—Br. 195 は、《キリスト教の証拠にはいるまえに、……》という書き出しで始まっている、したがってこの断章は《宗教の証拠》(19°~26°)の前に来ることになる。しかし、同じく Non classé の La. 11—Br. 194 の末尾には、次の語が見られる——《……かくも神聖な宗教の証拠によって納得させられるようになることを希望する。その証拠を、私はここに集め、だいたい次のような順序に従った……》。それゆえ La. 11 が《宗教の証拠》(19°~26°)の直前に、すなわち La. 12 の後に来ることになる。ところで La. 12 の末尾は、《なぜなら、自分が何であるかについてのこのような無知のなかにあって、そのことの解明をさがし求めようともしないで暮らすことを選ぶときには、人々は次のように論じるからである。彼らは言う、「私は知らない……」》となっているが、これはまさに La. 451—Br. 228 の内容と一致するものである——《無神論者たちの反論。「だが、われわれには何の光もないのだ」》。そうしてこの La. 451こそは、18°《宗教の基礎と反論への回答》の章中における最後の断章にほかならないのである。La. 12 が Non classé であり、かつ La. 451 (Classé) より遥かに長文であること、またその内容が充実していることから観て、前者が後者にとって代わるはずだったことは、明らかである。したがって、La. 12 が 18° の最後の部分を構成するものと、言いうる。それゆえ La. 11, La. 12, 《宗教の証拠》(19°~26°), 18° の四者の関係は、18°《宗教の基礎と反論への回答》→La. 12→La. 11→《宗教の証拠》と連続直結することになり、13°《理性の服従と利用》がこれらの中に介入する余地はない。仮に La. 12 と La. 11 の間に 13° を挿入する場合、連続の不自然さは蔽い難い。以上 (b), (c) の場合がともに否定され

たのであるから、当然 (a) が正しいことになる。すなわち 13° は 18° の直前、つまり 17° の直後に置かれることになり、以上のものの前後関係は、17° → 13° → 18° → La. 12 → La. 11 → 《宗教の証拠 (19°~26°) となる。

### III 各章の順序の決定

(一) IIにおいて述べられた個々の結論を整理総合すると、次のごとくなる。IIの(一)により11° → 12° (Ⅷ回参照)。(二)により12° → 15°。(三)により15° → 15° bis → 10°。(四)・(五)により10° → 9° → 16° → 17° → 18° (X回参照)。(六)により17° → 13° → 18° → 《宗教の証拠》(19°~26°)。したがって、これらを更に整理すると、IIの総合的順位が得られる——11°《A. P. R.》→ 12°《始め》→ 15°《人間を知ることから神への移行》→ 15° bis《本性の墮落》→ 10°《至福》→ 9°《哲学者たち》→ 16°《他宗教の虚偽》→ 17°《愛すべき宗教》→ 13°《理性の服従と利用》→ 18°《宗教の基礎と反論への回答》→ 19°~26°(宗教の証拠)。

(二) Iの(二)において、われわれは各章の順序決定の方法について触れておいた。それは、《アポロジ》を形成する重要事項その他を手掛りとして、決定する方法であった。その結果、われわれは例えば関係網を構成する章群の図を得た(第Ⅷ回のIIの四の図参照)。この関係図のうちに、われわれは10°《至福》と9°《哲学者たち》の両章を見出す、これらは『第一写本』においては、《第一部》に配置されているものである。しかし、プランのレジュメである11°《A. P. R.》の叙述全体の分析検討により、これらがともに《第二部》に属していることが、判明した(IIの四および第Ⅸ回の五参照)。こうしてわれわれの方法の正当性が、実証されたのである。したがってわれわれは、今後もこの方法を維持するであろう。

### IV 《A. P. R.》の解釈にかんする一試論

われわれは上述において、La. 309—Br. 430 すなわち《A. P. R.》のタイト

ルをもつ断章を取り扱って来たので、今度はこのタイトルそのものの意義の解釈を試み、これにかんするわれわれ自身の一仮説を、提示することにし度い。

(一) このタイトルは普通、〈A Port-Royal〉の略語と解されている。その根拠は主として、(イ) — この断章自身がパスカルの《アポロジ》の下書の一部であること、(ロ) — Filleau de la Chaise および Etienne Périer のおのおのの手に成るポール・ロワイヤル版『パンセ』の〈Discours de Pensées de M. Pascal〉および〈Préface〉中に、パスカルが彼の《アポロジ》にかんして、ポール・ロワイヤルにおいて講話を行った旨が述べられていること<sup>(14)</sup>、(ハ) — 略語の《P. R.》にかんしては、La. 111—Br. 151 中に《Les enfants de P. R. auxquels on ne peut point cet aiguillon d'envie……》<sup>(15)</sup> なる叙述があり、この文中の《P. R.》は断章全体の文意から推して、〈Port-Royal〉としてしか解しえないことから見て、前出の《P. R.》も同意義と解しえられること、以上である。

ところで P. Ernst は、《A. P. R.》は A. の省略点が存するところから、これを前置詞 A と見做すことは出来ないとして、次の三種の読み方を提案している — 〈Apologie (à) Port-Royal〉, 〈Apologie Pour (la) Religion〉, 〈Apologie : Prosopopée (de la) Religion〉<sup>(16)</sup>。

(二) 以上のごとき通説ならびに P. Ernst の所説に対して、次のごとき反論がありうる。すなわち、(イ) — Ph. Sellier が指摘しておる点<sup>(17)</sup>、つまり Périer が《Préface》中で、パスカルが《sans avoir été prémédité, ni travaillé》という状態で行われたと書いていること<sup>(18)</sup>、(ロ) — 次に Cognet 師が、当時のポール・ロワイヤルの多量の書信を検査したにもかかわらず、パスカルの講話を示すものはなんら発見されなかったという事実である<sup>(19)</sup>。

(イ) の点にかんしては、Périer が斯く述べているので、La. 309—Br. 430 がポール・ロワイヤルにおけるパスカルの講話の草稿とする一般的見解は、これを一応疑問とせねばならないというのが、Sellier の暗示するところである。また (ロ) の点は、パスカルの講話自体に対して疑問を呈するものであり、したがって同断章が講話内容を多かれ少かれ示すものであるということを、根本的に疑問視するものである。

(三) われわれはまず (ロ) の問題から論ずることにしたい。もし仮りに、パスカルが彼の《アポロジ》のプランにかんする講話を行わなかったとするなら、Filleau ならびに Périer の述べていることは、事実上虚偽の事柄ということになるであろう。したがってもしこの偽りの事実が露見するならば、所謂ポール・ロワイヤルの Messieurs の名誉なるものは、多大の損傷を蒙らざるをえないであろう。況んや当時は、「教会平和令」(教皇クレメンス四世により、1668 年 10 月に発布)により、Jésuites と Jansénistes との対立抗争は一時的に休戦状態にあったとはいえ、両者の鬭争は決して解消していたのではない。それゆえ、ポール・ロワイヤル派は叙上の虚偽を黙認協力した点において、またパスカル家はその一員が《序文》の執筆者であるという点で (Périer はパスカルの甥であった)、両者はともに『パンセ』の《序文》に対し、責任を問われる立場にあったのである。したがって両者の不名誉は、相手方の Jésuites の批判に対して有利な攻撃材料を提供することになることは、明らかであったと言えよう。更にかかる不道德は、ポール・ロワイヤルを支持する人々の信頼を裏切るものであり、世評一般の非難を招くことも、明らかであったと言えよう。それゆえ、われわれには、かような道德的危険を冒してまで、ポール・ロワイヤルおよびパスカル関係の人たちが講演の虚偽を捏造したとは、考えられないのである。

特に、パスカルの講演時間にかんして、Filleau が《Il parla pour le moins deux heures;》<sup>(20)</sup> と述べ、また Périer が《un discours de deux ou trois heures》<sup>(21)</sup> と記していることも、これを兩人協同のフィクションと見做すことは余りにも穿ち過ぎた見方であって、不自然の感を免れ難い。むしろこれらの記述は、講話の事実を裏付ける現実感を、われわれに与えずにはおかないと、言えよう。

次に、パスカルの講話の事実を示すものに、パスカル自身によって記された次の語が、存する。La. 309—Br. 430 (Ed. du Seuil, La. 149)<sup>(22)</sup> 中の《A. P. R. Pour demain. Prosopopée.》および Ed. du Seuil (La. 149) 中の《A. P. R. pour Demain. 2.》が、すなわちこれである。これら《Pour demain》および《pour Demain》の語は、講話の期日を意味するものと、一般に解釈され

ているが、この解釈は極めて自然であって、無理がないと言いうるであろう。

扱て上掲の(イ)の点について、検討してみよう。Sellier の引用句——《sans avoir prémédité, ni travaillé》は、註<sup>(18)</sup> に掲げられた引用文の一部であって、パスカルの講演の事実を認めた上での立論である。ところで Sellier の引用句は、今われわれが問題としている断章 (La. 309—Br. 430) が該講話の下書ないし構想とは見做しえないほどの否定的意味を、有しているであろうか。prémédité の核心部分たる médité の原形——méditer は、古辞典によれば、〈Penser attentivement à quelque chose.〉<sup>(23)</sup> を意味するものであり、travaillé も、その原形 travailler (verbe actif) は、〈Tourmenter, causer de la peine.〉<sup>(24)</sup> の意である。したがって引用句の意味するところは、大略「予め念入りに考え抜かれた苦心作たるプランを持つことなしに」パスカルが講話を行ったと、解すべきものであって、「予めなんらの構想もなしに即席に講話を行った」という意味ではありえない。引用文 (註 18 のもの) の意味するところは、Périer が同序文中で、次のごとく述べている事を、別の表現で叙したものと言いうるのである——《Il [Pascal] leur développa en peu de mots le plan de tout son ouvrage; il leur représenta ce qui en devait faire le sujet et la manière; il leur en rapporta en abrégé les raisons et les principes,……》<sup>(25)</sup>、この引用文に見られる通り、パスカルは《le plan de tout son ouvrage》を明らかに有していたのであり、ただこれを《en peu de mots》および《en abrégé》という形ちで発表したのにすぎないのである。したがって言葉の全く厳密の意味で、全然プランなしに講話したと解するならば、不条理と評する外はない。

Lafuma によれば、パスカルが《アポロジ》のための断章を書き始めたのは、1657 年 6 月からであり、その分類をはじめたのは 1658 年代のことである<sup>(26)</sup>。而してパスカルが講話を行った時期は、1658 年 5 月頃 (Mesnard 説)<sup>(27)</sup> か、1658 年 10 月～11 月頃 (Lafuma 説)<sup>(28)</sup> である。それゆえ分類の時期と講話の時期とが近接ないし一致している以上、しかも両者とも《アポロジ》にかんするものである以上、プランの存在は必然的であり、無い方が反って不自然であると、言いうるのである。ところで講話の事実を認める以上、パスカルが講話の草稿として《A. P. R.》の断章 (La. 309—Br. 430) を書いたこと

は、これを認めざるをえないのである。なぜと言って、Chevalier および Ernst の研究により、講話の内容 (Filleau または Périer の報告内容) と《A. P. R.》の断章内容との符合一致が、明らかにされておるからである<sup>(29)</sup>。このことは、パスカルが講演会場でこの断章の草稿を直接手にして、講話を行ったということ、必ずしも意味しない。むしろ彼がこの草稿内容を十分脳裏に収めていたので、これを手にする必要が無かったとも、言いうる。そうしてこのことが、聴講者に《sans avoir été prémédité, ni travaillé》という印象を与えたということも、ありえないわけではないのである。ともあれ、われわれは、以上述べたところすべてにより、パスカルの講話は事実であり、かつ《A. P. R.》の断章はこの講話の草稿であることを、承認するのが妥当であると言わねばならないのである。それゆえ、《A. P. R.》の略語は、Apologie à Port-Royal (Ernst 説) もしくは Apologie de Port-Royal と解すべきものと、われわれは判断するのである。

(四) それでは何故パスカルは、ポール・ロワイヤルにおいて、彼の構想する《アポロジー》の内容を、披瀝したのであろうか。それは言うまでもなく、ポール・ロワイヤルの人たち (Arnauld, Nicole, etc.) の批評を通じて、《アポロジー》の内容をより充実しようとしたものであることは、言うまでもない。しかし、パスカルはその《アポロジー》の公刊を意図していたということに、われわれは注意を向けねばならない。なぜなら、彼の著作の発表の暁には、パスカル自身ならびにポール・ロワイヤルの人々は、パスカルの《アポロジー》の内容と公表自体について、少くともポール・ロワイヤルに好意を持つ人々に対して、責任を有するからである。もしパスカルが、内容上非難に価する《アポロジー》を公表したとするならば、著者自身はもとよりその公刊を拱手傍観していたポール・ロワイヤルの指導者たちは、周囲の人々からまた Jésuites から、多かれ少かれ非難を蒙むことは、必定である。かくて内容の改善はもとより、〈Apologie (à ou de) Port-Royal〉なる名称の正式承認をうるためにも、パスカルは——彼がポール・ロワイヤルに所属していた以上——講演会を開かざるを、えなかったのではあるまいか。われわれは斯く推測するものである。

しからば、なぜ—— Cognet 師の言うごとく——講話の事実を記す書簡が、発見されないのであろうか。かかる書簡は、紛失したのでであろうか。われわれは、否と答えるものである。われわれの推測と結論を理解するためには、次の事柄を知っておく必要がある。それは、当時における学界の現代にも通ずる一風潮についてである。当時における学界は、新原理・新事実・新機械等の発見・発明を競って誇示する傾向が存した。パスカルと関連した事柄にかんしても、例えばパスカルが行った有名な真空の実験のアイデアを最初に言い出したのは、自分自身であると、デカルトが出張したのは、その好例である<sup>(30)</sup>。またパスカルの死後、『パンセ』のポール・ロワイヤル版編集委員の一人 Filleau de la Chaise (先述の Discours の筆者) は、パスカルの《Démonstration évangélique》を剽窃して、当時の一部人士 (Daniel Huet, Goibaud du Bois, etc.) により、問題視された事件を惹起したのである<sup>(31)</sup>。

ところで、パスカルの講演の結果、彼の要望していた論述の内容および先述の章名の正式承認が、ポール・ロワイヤルの有力者たちによって支持されたであろうことは、容易に推測される。なぜなら、Arnauld, Nicole が『パンセ』の刊行に協力しているからである。しかし、《A. P. R.》が〈Apologie (à ou de) Port-Royal〉であり、その内容の重要部分を構成するものが、当時において独創的な《Démonstration évangélique》であるとするなら、ポール・ロワイヤルの人士たちが、彼らの学的功績を独占するため、その内容が外部に漏れることを危懼したのは、当然であると思われる。この結果ポール・ロワイヤルの内部においては、厳しい緘口令が敷かれたのではあるまいか。かくしてポール・ロワイヤル関係の書簡中には、パスカル講話の件が触れられなかったと、われわれは推測しうるのである。

(五) しかしわれわれは、茲で一つの問題に逢着するのである。それは、パスカルが彼の死に近い時期まで、諸断章に推敲の手を加えていたからである。われわれは既に、彼が 1661~1662 年にあっても、断章 (3 個) の不如意の部分で抹消している事実を、知っているのであるが<sup>(32)</sup>、未分類断章 (Non classé) 執筆の時期においても、既分類のもの (Classé) に手を加えて変更しておく例を、次に掲げてみたい。Non classé の La. 40—Br. 74 中には、次の叙



述が存する——《〈……しうる者は幸福である〉/〈何事にも驚かないことこそ幸福である〉》。ところで Classé の La. 124—Br. 73 中には、次の文章が見出されるのである——《〈事物の原因を知りうる者は幸福である〉……〈何事にも驚かないことこそ、幸福を与えかつ保たしめうるほとんど唯一のものである〉》。而して後者の断章 (La. 124) は、パスカル自身によって抹消されているのである。したがって、パスカルはこの部分を、Non classé 執筆の時期に、前者の断章たる La. 40 の一部に移したのである。なぜ Non classé の時期において行われたかが分るかと言え、La. 40 がリヤス (断章の分類綴) 中に編入されていた断章ではないからである。

こうしてわれわれは、《A. P. R.》にかんして、一つの疑問に出会うのである。それは、なぜこの略字は、ポール・ロワイヤルの人々の承認後にあっても、——他の諸断章には手が加えられているにもかかわらず、また重要な章名であるにもかかわらず——なお依然として、略語のままであったのか、という事である。すなわち、なぜ〈Apologie (à ou de) Port-Royal〉と正式名に書き直されなかったのか、という疑問である。

一般的に言って、略語よりも正式名の方が、読者にとって意義明瞭であることは、言うまでもない。事実われわれは、《A. P. R.》以外の章名は、略字によって表現されてはいないのである。正式の章名は、一義的に明白である。パスカルが、これを知らぬはずはない。パスカルは、自己の思想・論述内容を、読者に明瞭に伝えようと欲したのに相違ないから、略言を使うことは、奇異と言わねばならない。しかしわれわれは、茲で簡単な論理学の原則を顧る要がある。たしかに、正式名たる〈Apologie (à ou de) Port-Royal〉は、一義的に明瞭であるが、逆に明瞭である場合は、一義の場合のみに限られているであろうか。「逆は必ずしも真ではない」とすれば、二義の場合にのみあるいは多義の場合にのみ明瞭でありうるごとき語もまた存在すると推論しうることを、われわれは見逃してはならないのである。

扱て上述の事実 (五の前の方で述べられた事柄) の外に、更にわれわれは次の事実を考慮する必要が存する。すなわち、二種の写本中に見出されるタイトル表のうちには、抹消された章名——《Opinions du peuple saines》が、存す

る<sup>(33)</sup>。それにもかかわらず、同じ表中に見られる《A. P. R.》の章名には、なんらの変更も見出しえないのである。それゆえわれわれは、《A. P. R.》こそは、パスカルにとって正式章名の予定であったと、推定せざるをえないのである。かくしてわれわれは、直前の(五)により、《A. P. R.》なるタイトルは二義的ないし多義的であったと、結論するものである。

(六) 一般に略語によって三義以上を意味せしめることは困難であるから、われわれは当の略語を、二義的のものと、判断して差しつかえあるまい。それでは、《A. P. R.》のもう一つ別の意味とは、いったいなんであったであろうか。この略語が、La. 309—Br. 430のタイトルであるかぎり、われわれはこの略語の意義を、この断章自身の内容から取り出しうるはずである。それゆえわれわれは、この断章そのものを調査検討することにしよう。

この断章中には、次の叙述が存する——《真の宗教は、われわれの無能をいやす薬と、その薬を手に入れる手段を、われわれに教えてくれるものでなければならぬ。そのような点について、われわれは世界のあらゆる宗教を検討してみよう。そして、キリスト教以外に、それらの点を満足させるような宗教が他にあるかどうかを考えてみよう。／われわれのうちにあるもろもろの善を、そのまま善として提示する哲学者たちは、どうであろうか？ それがはたして真の善であろうか？ 彼らはわれわれの悪をいやす薬を見いだしたであろうか？ 人間を神とひとしくさせたことによって、彼らは人間の不遜をいやすことができたであろうか？ われわれを禽獣にひとしいと見た人々、地上の快樂を永遠の世界においてもそのまま善としてわれわれに与えたマホメット教徒たち、彼らはわれわれの邪欲をいやす薬をもたらしたであろうか？ それではいかなる宗教が、われわれの傲慢をいやす方法を、われわれに教えてくれるであろうか？ 要するにいかなる宗教が、われわれの義務、われわれをそれからそむけさせる弱さ、その弱さの原因、それをいやしうる薬、その薬を手に入れる手段などを、われわれに教えてくれるであろうか？／他の諸宗教はいずれもそれをなしえなかった。神の知恵はどうするであろうかそれを見よう。……》<sup>(34)</sup>

(Il faut qu'elle [la véritable religion] nous enseigne les remèdes à ces impuissances et les moyens d'obtenir ces remèdes. Qu'on examine sur cela

toutes les religions du monde et qu'on voie s'il y en a une autre que la chrétienne qui y satisfasse. /Sera-ce les philosophes qui nous proposent pour tout bien les biens qui sont en nous? Ont-ils trouvé le remède à nos maux? est-ce avoir guéri la présomption de l'homme que de l'avoir mis à l'égal de Dieu? Ceux qui nous ont égalés aux bêtes et les mahométants qui nous ont donné les plaisirs de la terre pour tout bien, même dans l'éternité, ont-ils apporté le remède à nos concupiscences? /Quelle religion nous enseignera donc à guérir l'orgueil, et la concupiscence? quelle religion enfin nous enseignera notre bien, nos devoirs, les faiblesses qui nous en détournent, la cause de ces faiblesses, les remèdes qui les peuvent guérir, et le moyen d'obtenir ces remèdes? Toutes les autres religions ne l'ont pu. Voyons ce que fera la sagesse de Dieu./.....)<sup>(35)</sup> .....この引用文の主旨とするところは、——これはまたこの断章全体の主旨でもあるが——《真の宗教》la véritable religion たるキリスト教こそが、《われわれの悪をいやす薬》le remède à nos maux<sup>(36)</sup> であり、かつはまた《われわれの邪欲をいやす薬》le remède à nos concupisconces であるということ、そうしてまた他の諸宗教はかかるものたりえないということ、こうしたことである。

パスカルの《Apologie》は、言うまでもなく《キリスト教》la religion chrétienne のための《Apologie》である。したがってまた、キリスト教が《もたらす》apporter ところの《いやす薬》をも擁護するところのものである。蓋しキリスト教の提示する救済手段のために弁明せぬごときアポロジなるものは、アポロジの名に価せぬからである。而してキリスト教の教える救済薬のために弁明するアポロジそれ自身もまた、一種の救済薬たるに相応しいものである。それゆえ、《Apologie》は救済薬 (le remède) のための (pour) アポロジであり、かつはまた救済薬 (remède) としての (pour) アポロジである。かくしてわれわれは、《A. P. R.》とは〈Apologie pour (le) Remède〉を意味するものであったことを知るのである。それゆえわれわれは、《A. P. R.》なる略語は、パスカルにあっては、〈Apologie (à ou de) Port-Royal〉および〈Apologie pour (le) Remède〉の二義ないし三義を有していたものと、主張するの

である。

(七) われわれはかように、《A. P. R.》の略語は正式章名であり、かつ二義ないし三義において使用されていたものと、推測するのであるが、パスカルは果たして言語に対するかかる使用の傾向ないしかかる言語のあり方に、関心を有していたであろうか。われわれは次に、パスカルがかくのごとき言語の遊戯ないし特殊の使用法に対して関心を抱いていた事実を提示することにした。

(a) ——まず第一に、パスカルが彼の筆名を *anagramme* によって、三種のものを用いたことは、既に著名なる事実である。すなわち、彼はペンネームとして、*Salomon de Tultie*, *Louis de Montalte*, *Amos Dettonville* の三個を使用したのである<sup>(37)</sup>。(b) ——次にわれわれは、聖書の言葉に対する彼の象徴主義的解釈を指摘することが出来る。パスカルは、彼の一書簡中において、次のごとく述べている——《こうした考察には、聖書におけるあの匿れていませぬ神様の靈性をもさらに付け加えることが出来ましょう。と申すのは、字義 (*le littéral*) と秘義 (*le mystique*) という二つの完全な意義があるからです。ユダヤ人たちは、一方の意義だけにとどまって秘義があることは考えてもみず、また探そうなどとは思ってもみません。》<sup>(38)</sup> かように彼は、聖書の一語句に二重の意義を認識していたのであって、語の特殊的使用に対して関心を有していたことを、われわれは知るのである。

(c) ——われわれは最後に、かの高名なる断章 *La. 217—Br. 348* を引用しよう——《*Roseau* pensant.—Ce n'est point de l'espace que je dois chercher ma dignité, mais du règlement de ma pensée. Je n'aurai point davantage en possédant des terres: par l'espace, l'univers me comprend et m'engloutit comme un point; par la pensée, je le comprends.》この文中の最後の語たる《*comprendre*》が、「包含する」と「理解する」の二義を有することは、既に常識化した解釈である<sup>(39)</sup>。

以上述べて来たところにより、われわれは、パスカルが言語の特殊な用法にかんし十分関心を抱いていた事実を知りうるであろう。それゆえ、《A. P. R.》なる略語に、彼が二義ないし三義を与えたとしても、われわれは決して不思議ではないのである。しからばなぜ彼は彼の著作において、敢えて略語を正式章

名として、使用しようとしたのであろうか。

(八) 直前の問いに答えるためには、われわれはパスカルの著作態度を知らねばならないのであるが、これはすでに今回において述べられたところである(Ⅱの六の(ハ)参照)。再言すれば、われわれは、パスカルが読者の《気に入る》ように工夫し、《最もよく人の心に食い込む》ように心掛けたことを知るのである。つまり、彼は読者の関心を掻き立て、その心情に訴えることを、意図したのである。それゆえ、《A. P. R.》の略語を彼の著作の正式章名としたのも、読者の関心を、更に言えば quiz 的興味を喚び起こすテクニックの表われと、見做しうるのである。

パスカルが『パンセ』において、種々の叙述形式を駆使していること、あるいは諸形式を利用せんとしたことは、『パンセ』を一読すれば、明白であると言えよう。事実彼は、一般的な論述形式(その中でも、所謂《Pari》の断章は独特のものであるが)<sup>(40)</sup>の外に、書簡形式(La. 27—Br. 184, La. 30—Br. 248, La. 34—Br. 246, etc.), 対話形式(La. 25—Br. 227, La. 46—Br. 20), モノローグ形式(La. 389—Br. 693), 擬人法(La. 309—Br. 430)を用いて、叙述形態を多様化しているのである。したがって章名にかんしても、略語を使用して変化を与えたことは、パスカルの態度としては、極めて自然であると言いうるのである。特に全章名のうち、一個のみを略語で表現したことは、読者の注目、関心を喚起するのに十分であり、甚だ効果的であると言えよう。以上読者のクイズ的関心を惹起せしめることと、章名に変化をもたらすこととの二点が、パスカルによって、《A. P. R.》なる略語が用いられたことの形式上の理由であると解しうるのである。

(九) われわれは最後に、《remède》と《apologie》なる二つの語の必然的関係——パスカルの言語使用法の上から見た、両者の必然的連関について、いささか追究してみたい。われわれは、語義上《remède》に類似した二つの語(名詞)を、パスカルの著作中に発見しうる。《ressource》および《salut》が、即ちこれである。これらの語の頻出回数を、彼の『パンセ』、書簡集、および『恩寵文書』(Écrits sur la grâce)について調査した結果は、次のごとくである<sup>(41)</sup>。

パスカルの〈アポロジ〉のプラン復元に関して (XI)

	ressource	remède	salut
パンセ	1	19	5
書簡集	0	1	2
恩電文書	0	0	31
頻出回数 (総計)	1	20	28

この表中の三つの語は、パスカルにおいて、それぞれ異った意義を有するものであったことに、われわれは至大の注目を要するのである。まず初めに、《ressource》なる語は、パスカルの用例に徴するとき、例えば悪にたいする対策一般、すなわち宗教上から見て正しい手段のみならず不正なる手段によっても、この悪を解消ないし廻避せんとすることである。不正なる手段とは、例えば魂の不幸を、《気晴らし》divertissement に耽けることによって、不幸の意識から逃避せんとする場合である。

次に《remède》について言えば、これはパスカルの使用例から見て、あくまで救済手段にすぎないということである。この点において、古辞典の規定するところと、一致している（註 36 参照）。而してこの《remède》をもたらす直接の主体は、神のほかキリスト教、教会、真正のキリスト者等であって、パスカルの立場からすれば、被造物も《remède》を人に与えうると、推測しうるのである。これに反し、《salut》をもたらしうる直接の主体は神のみであって、使用例の上から言って、例外は皆無である。ここに《remède》と《salut》の語義上の差異が歴然と存するのであって、この差異は重大と言うべきである。パスカルの神学思想の上からは、《remède》は神による救済（salut）に対する一助にすぎないのであって、飽くまで手段的補助的意義を脱するものではないのである。この副次的なものと同源的なもの（神）との峻別意識は、パスカルの次の書簡文によって、明らかである——《……姉さんにしろ誰にしろ、それを神以外の誰からも教えられないはずだからです。誰から教えられたかを知っているからといって、それを教えてくれた人々が、ただそのよきものの仲介者であるのにすぎないのに、その造り主であるかのように思って、その人々に気

をとられてしまう、というのではないでしょうけれども、しかしやはりそれは神をじかに見るのに小さな障害になることはたしかなのです。よきものを自分に伝える対象そのものを、その源と思い込ませる肉的な印象から完全に抜け切っていない人々にはとりわけそうなのです。》<sup>(12)</sup>

かように《salut》をもたらすものは、神のみであって、宗教・教会・キリスト者等一切の被造物はこれを人に与えることが不可能であり、後者はただ《salut》に対する一助にすぎないとするパスカルの思想は、彼が《アポロジ》にかんする著書を意図していた時、彼の意識に厳存していたことは、これを疑いえぬであろう。したがって《Apologie》の執筆と公刊は、彼にとって、この書が、キリスト教を通じて神の《salut》を手助けするという意義を有するかぎり、《salut》——Dieu; 《remède》——religion, église, etc. の二系列のうち、後者に属すべきものと彼が考えたであろうことは、争いえない事実であり、この二系列は《apologie》なる語義を彼が念頭に置いていた時、必ずやパスカルの脳裏を強く支配していたものと推測しうるのである。かくて《A. P. R.》の《A.》が《Apologie》を意味するかぎり、而してパスカルが彼の《アポロジ》の公刊を意図していたかぎり、換言すれば神の《salut》の業の一補助として意識していたかぎり、パスカルの《Apologie》なるものが、彼の語法の上から言って、《remède》なる表現と結びつくことは、蓋し必然的であったと言いえよう。それゆえ、われわれが《A. P. R.》を、〈Apologie pour (le) Remède〉と解することは、極めて合理的なのであり、これは決して牽強附会ではないのである。

#### 註

- (12) 拙論Ⅶ回、Ⅲを参照のこと。
- (13) OŒuvres complètes de Pascal, par Lafuma (Éd. du Seuil), Paris, 1963, p. 356.
- (14) Voir Blaise Pascal, Pensées sur la religion et quelques autres sujets, Introduction de L. Lafuma, Éditions de Luxembourg, Paris, 1951, t. III Documents, p. 134 (Etienne) et 91 (Filleau).
- (15) この引用文の断章番号は、Lafuma 編集の Delmas 版のものであるが、引用文そのものは、Pascal, OŒuvres complètes (Éd. du Seuil), op. cit., p. 508 (La. 63—Br. 151) に拠っている。

- (16) Pol Ernst, *La trajectoire pascalienne de l' Apologie*, Paris, 1967, p. 11.
- (17) Philippe Sellier, *Blaise Pascal, Pensées*, Paris, 1976, p. 105, note 1.
- (18) Périer は、次のごとく記している——〈……ce qu' elles\* virent de ce projet et de ce dessein dans un discours de deux ou trois heures, fait sur-le-champ sans avoir été prémédité ni travaillé, leur fit juger ce que ce pourrait être un jour……〉 (*Pensées*, Éd. Lafuma, Éd. du Luxembourg, op. cit., p. 134).
- \* elles=plusieurs personnes très considérables de ses amis [ses amis =amis de Pascal].
- (19) Blaise Pascal, *l'homme et l'œuvre* (*Cahiers de Royaumont*), Paris, 1956, p. 100.
- (20) *Pensées*, Éd. Lafuma, Éd. du Luxembourg, op. cit., p. 91.
- (21) 註 (5) 参照。
- (22) La. 309 は Éd. Delmas の断章番号であるが, Éd. du Seuil (La. 149) の方が, 厳密に再現されている。〈A. P. R. pour Demain. 2.〉なる語は, Ed. Delmas では省略されている。
- (23) *Le Dictionnaire de l' Académie française, Tome second (M-Z)*, Paris, 1694, p. 36. (reprint).
- (24) *ibid.*, p. 592.
- (25) Éd. Lafuma, Éd. du Luxembourg, op. cit., p. 134.
- (26) Lafuma, *Controverses pascaliennes*, Paris, 1952, p. 33 et 46.
- (27) J. Mesnard, *Pascal, l'homme et l'œuvre*, Paris, 1956, p. 129.
- (28) Lafuma, *Controverses*, op. cit., p. 44.
- (29) J. Chevalier, *OEuvres complètes de Pascal* (*Bibliothèque de la Pléiade*), Paris, 1954. p. 1085; P. Ernst, op. cit., p. 49.
- (30) Voir E. Boutroux, *Pascal*, Paris, 1910, p. 39.
- (31) Voir *Écrits sur Pascal*, Éd. du Luxembourg, Paris, 1959, p. 68-69.
- (32) 拙論V回, p. 23 参照。
- (33) 拙論VI回, p. 2 et 7 参照。
- (34) 訳文は, 松浪信三郎訳, 『定本パンセ (上)』 (*講談社文庫*), p. 185 に拠る。
- (35) 原文は, Éd. Lafuma, Éd. du Seuil, op. cit., p. 520 (La. 149—Br. 430) に拠る。
- (36) 訳文中の〈薬〉の原語は〈remède〉であるが, この語は古辞典に拠れば, 〈Ce qui sert à guérir un mal, une maladie.〉の意である (*Le Dictionnaire de l'Académie française*, op. cit., p. 392)。
- (37) Voir Blaise Pascal, *Pensées et opuscules*, Éd. Brunshvicg, Paris, 1953, p. 327, note 2.



- (38) Lettre de Pascal à Mlle de Roannez, fin d'octobre 1656.
- (39) Brunschvicg は、〈Pascal oppose ici le sens propre et le sens figuré du mot comprendre……〉と註している (Pensées et opuscules, op. cit., p. 488, note 4.)
- (40) 〈Pari〉(賭)の断章は、数学の公算法を用いたものであり、多数の諸家に問題を提起している——拙著『パスカル論攷』p. 41-42 参照。
- (41) 頻出回数調査に当っては、Pensées および Lettres にかんしては Éd. du Seuil を、Écrits sur la grâce については Éd. Chevalier (Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1954) を用いた。
- (42) Éd. du Seuil, p. 274——訳文は、『パスカル全集』第一巻、人文書院刊, p. 243 に拠る。(註了)

〈追記〉——(1) p. 2 において、La. 12 が 18° 章中の「最後の断章」なる旨が述べられているが、これはリヤスの内部を、普通考えられている順序で読むべきことを、前提としている。この論証は、後日に譲る。(2) La. 11 と La. 12 との連続性、ならびにこの間に 13° 章を挿入することの不自然さについて、少しく述べると——La. 1<sup>1</sup> および La. 12 は、ともに不信仰者の内的状態・宗教に対する態度・死後の状態にかんする叙述・批判を含む点で、共通性を有している。しかも両断章とも、13° の〈理性の服従と利用〉を直接テーマとする叙述は、これを見出し難い。